

2020. 8. 23. 聖霊降臨節第13主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書12章35-48節

『目を覚ましている』

今日の聖書箇所では、「目を覚ましている」という言葉が、とても大事な言葉として主イエスによって語られています。

「目を覚ましている」。文字通りには、眠った状態を終わらせ、目を覚ますとか、眠らないでいるとか、ということですが、もっと幅広く使われる言葉です。

例えば心の迷いを取り除く、という意味にも使いますし、「覚ます」という言葉は、酔いを醒ます、つまり何かに酔っていた状態から覚醒する、というふうにも使います。そこから「目を覚ましている」は、注意深く、自覚的にことさらに心を向けている、という意味にも使われていきます。そういう広がりのある「目を覚ましている」を、主イエスがここで語っておられる。それを念頭に置きながら、ここでの主の言葉に聞いていきたいと思います。

今日の主イエスの言葉は、ある種の「たとえ」のようでもあります。その「たとえ」で気がつくのは、ここは、主人と僕（しもべ）の話だ、ということです。僕というのは、奴隷のことです。奴隷というのは、主人に絶対的に服従する、あの奴隷のことです。

41節以下の話も、主人と奴隷の話です。ただ、日本語では全部僕となっていますが、元の言葉では、奴隷という言葉と、給仕するもの、召使い、仕える者という意味の言葉の二つが使われています。つまりここでは、ただ服従するもの、というだけでなく、主人に仕える者のことが語られているのです。41節でペトロが「主よ、このたとえはわたしたちのために話しておられるのですか。それとも、みんなのためですか」と質問しています。どうしてこんな質問をしたのか、と言え、主イエスのもとには12章の1節にあるように数えきれないほどの群衆が集まっていたからです。この場面は主イエスと弟子たちが大勢の群衆に取り囲まれている場面であり、そこに弟子たちもいる、という状況なのです。だからこそペトロは、この話は、群衆に向かって語られている話なのですか、それとも、わたしたち弟子たちのための話なのですか、と尋

ねたのです。ペトロの問いかけに対して、主イエスは、主人と奴隷の話が続いています。つまり、ここでの話は、あくまでも主人に仕える僕の話であって、それはキリストに仕える弟子たちの話だということです。だれでもいい、キリストに従わない人であっても誰もいい、という不特定多数対象の話ではない。イエス・キリストを信じ、従っていく、仕えていきたいと思っている、そういう人々にむけて語られた話なのです。

ここで語られているのは、僕に語られた言葉として「目を覚ましている」ということなのです。

わたしたちの身の回りには、身分制度上の奴隷はいません。会社の奴隷だとか、仕事の奴隷だというふうに表現する人はいますが、奴隷はいません。だから本当の奴隷というものは、ピンとこない。服従とか、仕えると言っても、この時代の奴隷から見れば、中途半端なものがほとんどでしょう。なぜならわたしたちは、自分を自分の主人にしていることが圧倒的に多いからです。だから服従と言っても、自分にとって都合のいい部分だけの服従であったり、気の向いた時に仕えるということであったり、あくまでも主人は自分、ということが多いのです。

最初に語られているのは、「主人が婚宴から帰ってきて戸を叩く時、すぐに開けようとしている人のようにしていなさい。」「主人が帰ってきたとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。」ということです。

冒頭にある腰に帯を締め、灯火をともしておきなさいとは、奴隷である僕が、主人が帰ってくるの準備万端いろいろ整えて待っている、備えのことです。

主人は婚礼に参加しています。当時の婚礼は、長ければ1週間ほども続くものでした。しかもそれだけ長い期間ですから、途中で帰る人、途中から参加する人、さまざまでした。つまり奴隷の側からいえば、いつご主人が帰ってくるか、わからないのです。しかし主人に仕える者としては、いつ主人が帰ってきてもいいように、準備を整えて、待つのです。

45 節以降の話も基本的には同じことを語っています。主人がたくさんの召使を使っている。その召使を管理するために立てた僕、管理人としての仕事を委任された僕なのですが、主人が不在の間、主人に命じられたとおりに実行管理する僕は幸いだ、ということです。

主人が不在の間に、主人の帰りが遅くなると思い、自分勝手に振る舞い、召使いたちに乱暴を奮い、飲み食い三昧になり、酔っ払っているのなら、思わぬ

時に主人は帰ってきて、僕を罰することになるのだろう、というのです。

両者ともに、主人が不在の間も、主人がいる時と同様、主人に仕える者として、主人に従う者としての姿勢、生き方を忘れないで持ち続けていくこと、「目を覚ましている」生き方だ、と言われているのです。

主人は不在です。けれども、必ず帰ってくることを受けとめている僕は帰ってきたときのことを思いながら、今日をすごす。その心持ち、目線、生き方が両者とも示されていると思います。

これは明らかに、終末のことが語られているのでしょうか。主が十字架にかかって死に、復活後に昇天して、目に見える形では地上に主イエスはいなくなる。主の不在の時を迎えるのです。終末の時まで、主イエスは地上に目に見える形ではない。しかし終末の時に主イエスはもう一度私たちのもとにやって来てくださる。だから主の僕である弟子たちは、終末に至る今このときを、何の備えもせず、このときをすごすものであってはならない。

下男や女中を殴るといふのは、何も暴力をふるう、ということだけを言っているのではなく、自分が主人であるかのような行動をするということです。僕は管理人なので主人の意思であるかのように自分の我を通すこともできるでしょう。それが下男や女中を殴るといふことです。食べたり飲んだり酔うようになる、それは文字通りの意味だけでなく、時代の流れにのみこまれて、時代の考えやそのときどきの流行（はやり）、世の中の時流に酔うことを語っている。酔う、というのとはここでは目を覚ましている、の対極、反対語です。主人の意思、主人の言葉を忘れ、時代の潮流に酔い、のみこまれ、精神が眠り込んでいく状態を指しているのでしょうか。

わたしたちはいつの時代にあっても、その時代時代の潮流というものの中で、翻弄されます。時代から自由、などという人は誰もいません。戦後のすぐの時代にはあの時の風、流れがあり、高度経済成長の時代には、あの時代の考え、流れがあり、わたしたちはその都度その流れに流されてきたのです。ただ、その中で「目を覚ましている」ということが求められているのです。酔いどおしなのではない。酔う時もあるかもしれない。しかし、目を覚ます必要があるし、目を覚まして、主人であるイエス・キリストの言葉を、その都度聞いていく必要があるのです。主イエス・キリストの言葉に聞いて、従っていくことそれ自体が、「目を覚ましている」ことなのであり、酔いから覚めることでもあるのです。

今日の聖書箇所の中に、とても印象的な一文があります。それは 37 節。

「主人が帰ってきたとき、目を覚ましている僕たちは幸いだ。はっきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる」という文章です。さらっと読むと通り過ぎてしまうようなところですが、主人が帰ってきたとき、目を覚ましている僕たちを、主人は食事の席に着かせる。そして主人は進み寄って、僕に仕えてくださる、と書いてあるのです。

終末の光景を描いたものです。その時、わたしたちは主の祝宴の席に招かれ、主イエス自らがわたしのもとに進み寄り、主イエス自らが給仕をし、仕えてくださる。それは主イエスがわたしたちのために仕える主であることがまことに明らかになるということでしょう。十字架も復活も、昇天も、すべて私たちに仕える主のわざであることが、この祝宴の席で見える形であらわになる。それが近づき、進み寄り、仕えてくださる、という短い表現の中に込められたキリストの心です。

主が仕えてくださっている。そのことこそがわたしたちが僕として主に仕える根拠です。主が仕えてくださっている、それこそが、わたしたちが感謝と喜びをもって、主に従っていく源です。主が今も生きて働き、終わりの日の救いの完成を約束してくださっている。それがわたしたちが、目を覚まして、今を生きていく、主からのメッセージなのです。